

宍粟鉄 その歩み

千種町から波賀町へ越す国道四二九号の路傍に石造りの碑があり、そこには『金屋子神降臨の地』と彫りこんであります。その碑から北方への脇道を一キロほど上ったところに荒尾鉄山跡が残されており、その一面に桂の古株と小さな祠があります。地元ではこの場所を『山の神』と呼んでいます。

島根県金屋子神社の祭文には、この地（千種町岩野辺）に降臨した金屋子神は『晴雨自在を与え、鉄より鍋、釜の作り方を教える』と言って傍らにあった磐を砕き、鉄を出して、鍋や釜を作って示した」と記されています。そして同文では、『私の居場所をもっと西にある』と、出雲国能義郡比田（安来市広瀬町）に移り、山中の桂の木の下に留まっていたところを村人に発見され、以降、神自らムラゲ（村下）にたたら場の責任者）となって、鉄作りを広めた」と伝わっており、出雲地方では千種の地がたたら製鉄の発祥の地と認識されています。今でも岩野辺の『山の神』の祠の管理人のもとへは、出雲の金屋子神社から二百数十年にわたり、秋と新年にお供えが届いています。

先の「金屋子神社祭文」はあくまでも伝承ですが、奈良時代初めの「播磨国風土記」には、敷草村（千種町）

や御方の里（一宮町北部）で「鉄を出す」という記事が見られ、古代の宍粟は実際に鉄の産地だったことがわかります。

もちろん、宍粟市内の製鉄が古代だけで途絶えてしまったとは考えられず、量の多寡は不詳なものの、平安時代から中世にかけても営々と続けられていたことでしょう。

平安時代末から中世初頭の時期の製鉄遺跡と見られる一宮町の安積山遺跡や千種町の高保木遺跡で生産された鉄を使つて、刀匠による刀剣鍛錬が行われたのかもしれない。十世紀末の永延年間（九八七〜九八九）には、宍粟住の刀工「家時」「助時」が、細身の直刀を鍛えたという話も伝わっています。

鎌倉時代には、備前の福岡や長船に刀工の村ができ、鉄の需要が増えたこともあり、当地の鉄もさらに量産されたと思われます。

宍粟で産出された鉄は、日本刀の原料として最高品質を誇るといわれ、「千草鋼」の名で各地の刀工に珍重されています。

それ以降も、宍粟ではたたら製鉄が盛んに行われており、市内のいたるところから、鉄山の遺跡や鉄滓（製鉄時のかす）が見つかっています。

また、江戸時代には現在の千種町西河内天児屋の地で大規模なたたら製鉄の村が営まれました。また、千種出身で山崎と大坂で鉄の商いを通して財を成した千草屋（平瀬家）という豪商が生ま

れるなど、宍粟の鉄は幕末まで、市場でも大きな力を有していました。余談にな



天児屋鉄山遺跡の復元模型。たたら製鉄の仕組みも学べます。

が、大坂平瀬家の平瀬露香という人物は文化人として有名で、「平瀬本源氏物語」（国重要文化財）を所有していたことでも知られています。

しかしながら、明治時代に入ると、西洋の新しい技術による製鉄が急速に普及し、宍粟の伝統的なたたら製鉄も衰退へと向かいます。

隆盛を誇っていた天児屋鉄山も、明治十八年には閉山し、たたら製鉄が行われなくなることにより、住人が次々に村を出て、最後は田畑や山林などに変わってしまいました。

宍粟市では、失われつつあるたたら製鉄の歴史を後世に残していこうと、天児屋鉄山遺跡をたたら公園として整備しています。

たたら里学習館（開館は四月（十一月）も併設されています。雪が解けたら、ぜひ宍粟の貴重な歴史遺産を訪れていただきたいと思います。

宍粟鉄を保存する会 上山 明

編集後記

気象予報士は、雨天のことを「天気が悪い」と言わず「天気がぐずつく」という言い方をされます。これは、農家などにとって雨は大切なものであり、雨が降ることは決して悪いことではないからだそうです。今年の冬は長い間雪が降らずに、交通の上では安心していましたが、反面、宍粟も含め全国のスキー場は大変な打撃を受けています。物事のもつ多面性に改めて気づくとともに、四季がはっきりしているといわれる日本で、冬に雪が降らないのはやっぱり寂しいなと感じた今年の冬です。

広報しろう 2月号

平成28年2月15日発行(131号)

発行／宍粟市 編集／企画総務部秘書広報課 〒671-2593 兵庫県宍粟市山崎町中広瀬 133-6

☎0790-63-3000(代) FAX 0790-63-3061(代) ✉info@city.shiso.lg.jp 🌐http://www.city.shiso.lg.jp